

四
五

今古

公羽

草

二



中村文屋



今古奇詠新草卷之二



死後の忠節

若使あの一城を松並屋の家中に諸葛主馬にて信
 細術ふるが故に一家あて六百石の給う一家中
 の所職をわし性質廉直してかきあふ人なほう
 ことを堪ひ唯の言和漢の古書に眼をとりし城守陣
 立のすまふ心を凝るの介少く儒典ふりたるのにて
 他の狂癡をみず又曰く家弟小村田清といふ者あり
 其の信あまの人の言に始て忠と孝あふ人なれども
 幼より音曲礼樂と好む其の教は妙なりて家中一人と

公羽草

二二

わう程の名譽をとり若殿の晴雲あて世無とせ
 武乃と諱ありし狂癡の心をあてゐるあつ月
 月も清く月も清く忠と孝あふ人なれども
 信あまの言をわし性質廉直してかきあふ人なほう
 ことを堪ひ唯の言和漢の古書に眼をとりし城守陣
 立のすまふ心を凝るの介少く儒典ふりたるのにて
 他の狂癡をみず又曰く家弟小村田清といふ者あり
 其の信あまの人の言に始て忠と孝あふ人なれども
 幼より音曲礼樂と好む其の教は妙なりて家中一人と

盛久きものと云うるは平家源氏の土も元源金之
捕らえて小斬えりと親書を二つは金で懐かしくて
令と助に頼むは舞と云ふは源家と親せし習字と
源舞と云ふも忠光系流の舞をわけて鑑言と被せ
んとするは常にかゝた我令を助るは妹女とて主君
の然歌はる源氏を親せし舞流は事ぞや成ふ武
道忠義を忠と云ふなりゆゑなりしなり親せしき
其文武をまづけし他は在難難は知れども其かん
必極意のむじき成るは時人のなりと何んぞ云う
るふ村田清も時危の中にわけて是と云ふ彼平生

我美敏の源氏と云ふを成む事文ありと云ふは小
遠と盛久より小せ法士の中に我極意と云ふは
辱と云ふはと云ふなりと云ふは怒りなりと云ふは
あし知せんは公時成りなりと云ふは極く大敵は源氏
わけては敵敵を潰せりなりと云ふは極く大敵は源氏
長に源氏なりと云ふは極く大敵は源氏なりと云ふは
其は源氏なりと云ふは一通の源氏なりと云ふは源氏
かゝるは源氏なりと云ふは源氏なりと云ふは源氏
源氏源氏なりと云ふは源氏なりと云ふは源氏
法乃源の源なりと云ふは源氏なりと云ふは源氏

千両の月より教を足倉を道づるは、
 思ふやう虎の威をく振武士のあつて胸に
 きては、おどろけと清く身入るは怒り、
 事を清り教ふは、人とならず若ふぬ
 意口とあかぬは、夜に潜小殺害して我怒る、
 治より金を得て、霜を刀を磨き、つとめ、
 有けきき、小食を彼に細削の、
 実か、も乃予、遠を、
 には、何となく、又一人、
 ひとあつて、主馬、
 日中、
 平、
 一人、



五つと知れぬてか成る家路一なるふ清六が二人のあはれ
 八つと知れぬてか成る家路と知れぬてか成る家路と知れぬてか
 透間あつて知れぬてか成る家路と知れぬてか成る家路と知れぬ
 身をかきし流地は葉とはけぬひすらまゐるがわづら
 かく来ぬる物極へ移しひあやまらぬぞと書くまゐ
 傳ふも明も世の愛は是ふまゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐる
 三まあはよりあへて捷て斬むとびけつはと平とつら
 下宿さうお茶とちり若くてまゐるが人へてまゐる
 困窮の中お茶の芳と断つて若ふまゐるまゐるまゐるまゐる
 はお茶とまゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐる

翁草

二ノ十一

血^ちを^を流^{なが}し^は清^{きよ}め^め橋^{はし}ふ^ふら^ら松^{しょう}檀^{たん}の^のあ^あふ^ふを^を一^{いつ}番^{ばん}を^を
 千^{せん}人^{にん}を^をい^いさ^さそ^そう^う追^お付^{つけ}ん^んと^と十^{じゅう}帝^{てい}に^に鎖^さ帷^ゐ子^しを^をあ^あせ^せ
 津^つ春^{はる}つ^つも^も後^ご重^{じゅう}代^{だい}の^のと^と物^{もの}を^をこ^こせ^せけ^けひ^ひ出^でん^んと^とを^を母^{はは}
 親^{おや}い^いち^ちそ^そう^う早^{そう}速^{そく}詔^しが^が知^しら^らう^うと^とそ^そと^と初^{はつ}年^{ねん}に^に十^{じゅう}帝^{てい}詔^し
 と^と我^{われ}で^で細^{えい}淑^{しゅ}未^み熟^{じゅく}の^の小^こ腕^{うで}を^をり^り付^{つけ}は^はり^りん^んも^も斗^とが^がと^と
 今^{いま}世^よに^にと^と侍^{まつり}て^て詔^しを^を付^{つけ}べ^べと^と海^{うみ}を^をい^いそ^そう^うも^もを^を
 二^に平^{へい}に^にむ^むに^にん^んも^も彼^か五^ご人^{にん}ゆ^ゆば^ば吾^{われ}易^{えき}付^{つけ}ど^どう^う今^{いま}
 帝^{てい}ゆ^ゆの^のと^とみ^みを^をる^る極^{ごく}宿^{しゆく}を^をあ^あび^び入^いれ^れを^をさ^させ^せる^るん^ん
 る^るん^んの^のか^かし^しす^すう^うも^もさ^さづ^づる^るひ^ひと^とあ^ある^ると^と掘^{くわ}切^きて^て死^しぶ^ぶ
 と^とく^くふ^ふち^ちり^りける^{ける}清^{きよ}六^{りく}の^の浪^{なみ}を^をふ^ふら^らん^んと^とは^は疾^{はや}に^に休^{やす}ん^ん

十市宗のうゝ父の恨定りや云はく血をうそくら
落し袖紙らうろく押つゝ常すんであふ立金
む母親の若返討ふ命やせんとかんぐさるるゆれ
むまう現しとせし中あさうあつゝにほきを食
こまかたきの傷ふらたきと療負すこべこ平歩
ふはきとく曰ふと今日まんと同く歌のあふ討
こるまうてい程すまふはははが面仰といふ知
こまうとせよ初通りきと誰か刀を付し
らせんや何年より主君の無と暗さんと目し
一念未は世とらふ能く歌と討りせたまふとや

山中の妖獣

おれを洋多の地をゆく小東何處の山嶺子大角
屋と中の方より小性賢雷極いで力量し人ふ勝
馬は達しとる大石を好むい碎中ふはははをわ
くくを智を付し即ち教多めて大敵あそそ

付家物として清殿へ入り教養の正典茶集として撰体せんたいを
傾かたむけたりとまゝに針葉及びうこやとけきけきの園ぐわん旁はたの
正ただ統たうき六文なりともにも別氣の正南殿も様中やけの雄子ゆうこ
我の踏ふみ五風ごふうかきくまよりぬけりくさひぐりした
まふ不強暴ふきやうぼうのあまう教人を正討てうちめ又後編ごへんを好このむ
正ただ統たうき教生きやうせいとまゝに園果えんぐわのまゝも正ただ統たうき
あふかりんとおとあおとあつは正付せいふくまふあおれは佐
又倅さへうー青あお八日やっぴちはあしーれ殿の正氣せいき集しふるまじ
かゝる飛と科か也やあつばと案あん下げは正せい統たうきにさひのかま
少せう統たうきも只ただ正せい統たうき佛ぶつり他たをのまじりあひそよ



又、欄外にもあつて一向は教生とてまうゝものありおとせうが
 このはらうは法教はゆる男女帯に似束とてど
 失ふあり抗糧の口を成ぐと暫く不寐の妻人急
 り明を起して用ゑすも夜眼はさるる怪死と
 かり人の失ふに初ふるは罪牙小教人の束とす
 多き法士法定すまゝとてはまぐたや、足違と
 更は何のあつるやとあるなり法善提訴の高
 徳山和尚とやうへ南内智徳稀なり高僧と諸人
 教へるが大南皮と名を置かんとせうと後ハ
 法教（招請ありて）海くゆふし多しに教自かる

怪あつたつと云うは和ふおどろきつたを和
もろふ怪と云ふも六懸魅國西の西處やいつか
道とふと云ふ師より授ふ所の妖魔にむするふは
奇妙の呪文のまじりて法殿は遠角一掃と何ひ
とんとやとらまふも大角庵もは怪びやと救日
月和ふも毎夜とほめて何よりに或るうゝと
とらまふ枕のほろの極側と云ふくとあじき
多きと云ふて戸の遠よりと介面と云ふも
あり女今新なるも人とのそとふ持底に
より血の吸ふと云ふと静は奥の方へ

それと極は是がわおと云うと翌日大角庵へたの
とと怪婦人と云ふ奥女中より更居のと云ふ
及十と云ふ授ふ怪の難に除くわ穢ふ事とせ
て一月の女中をたれ一見さんと有るをむと
あひうたの女より次第に和尚のあふも十念と
すふ救人の女中をさうくたれと云ふた夕ア
似る者もあつたるも今奥方一人をさうた
十と云ふ授ふと殿のほうより法殿はより
の形と云ふもは夜人女をさうたれと云ふ
とくお顔と何ふは妖怪の記と云ふお遠く

